

地球環境基金 便り

Japan Fund for Global Environment Report

no.
46
March
2019

特集

環境保全活動の現場に 来たれ! 若者たち



- 2 巻頭インタビュー：横澤夏子さん
- 4 特集：環境保全活動の現場にきたれ! 若者たち
- 10 CLOSE UP：コットンベルトの実現でさらなる復興を目指す
- 12 サポーターインタビュー：浅香工業株式会社
- 14 地球環境基金のサポーター
- 15 全国ユース環境活動発表大会 地方大会の報告



「エコプロ2018」に出展しました!

地球環境基金は、昨年12月6～8日に東京ビッグサイトで開催された「エコプロ2018」に出展。エコプロ来場者は3日間で16万2千人を超え、地球環境基金ブースにも多くの方々にお立ち寄りいただきました。

地球環境基金ブースでは、一昨年に引き続き「助成団体活動報告会」を実施し、助成3年目となる63団体が活動の成果発表を行いました。前回より2倍近く報告会のスペースを広げ、多くの方々に助成活動をお伝えすることができました。

イベントステージでは、「地球をまもる人になる～地球環境基金若手プロジェクトリーダー成果報告会～」を開催しました。「若手プロジェクトリーダー育成プログラム」の3期生9名が「ブ

プロジェクトリーダーとしての活動成果」「団体と個人のこれから」「会場の皆様に向けたメッセージ」の3つのテーマで発表を行い、それぞれの熱い想いを披露しました。会場からは、「環境保全のために行動をおこす事の大切さを感じました」「私も同じ若手として何か行動をおこしたいと思いました」といった共感の声をいただきました。



地球環境基金ブース「助成団体活動報告会」の様子



「環境クイズ」も実施しました

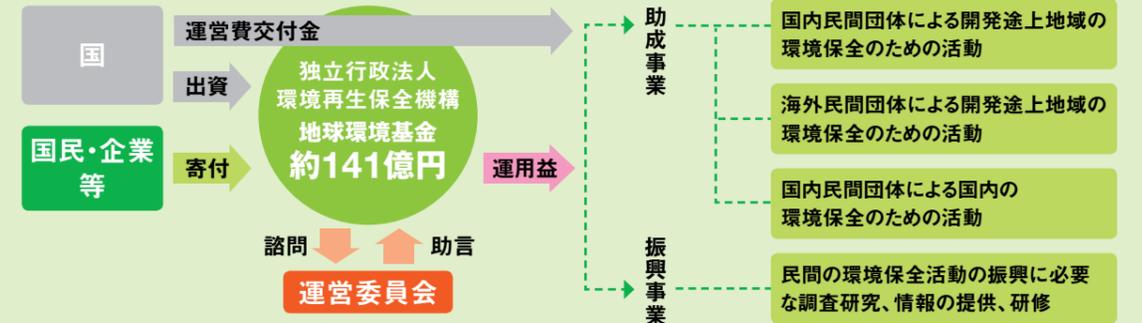


イベントステージ「若手プロジェクトリーダー成果報告会」



地球環境基金とは

環境再生保全機構は、国の出資金と民間からの寄付金により「地球環境基金」を設け、その運用益と国からの運営費交付金により、国内外の民間団体（NGO・NPO）が行う環境保全活動へ支援を行っています。



若い世代からベテラン世代までともに森林を整備する

表紙写真

若者が主体となって森林・里山の保全活動に取り組む「トキ環境未来基地」(本誌6ページ参照)。ボランティア参加者の半分以上が森林の整備作業は初めてで、ときには海外からの参加者もいますが、経験・年齢・言語の違いを乗り越えて充実した活動を実践しています。

編集後記

今号のテーマは「環境保全活動の現場にきたれ! 若者たち」。不純な動機でも、たまの参加でも、いろんな個性を尊重し受け入れる。その多様性が活動の幅を広げ、個々の可能性も広げてくれる。草野さんのお話を聞いて、そんなNPOなら若者でなくても参加したくなりました。

FOLLOW ME!



地球環境基金 便り

第 46 号 2019年(平成31年)3月1日号

発行/独立行政法人環境再生保全機構 地球環境基金部基金管理課
URL: <https://www.erca.go.jp/jfge/> E-mail: c-kikin@erca.go.jp
〒212-8554 神奈川県川崎市幸区大宮町1310番 ミューザ川崎セントラルタワー8F
TEL:044(520)9606 FAX:044(520)2192 編集協力/株式会社東京法規出版



独立行政法人 環境再生保全機構



横澤夏子さん

SDGsの目標の大切さを 笑いを通して伝えたい

テレビや劇場でたくさんの人に笑いを届けている横澤夏子さん。最近では、吉本興業(よしもと)が進めているSDGsのPR事業にも参加しています。テレビで見る、明るく気さくなキャラクターそのままに、「自身の子どもの時代での体験や将来の夢などを交えながら、横澤さんが身近で感じるSDGsの大切さをお聞きしました。」



高校時代に一念発起し、 憧れの芸人の道へ

私は、もともと目立ちたがり屋なんです。高校生の頃は生徒会長をやったり、今でも同窓会の幹事を買って出るほどです。本当は東京の大学に進学するつもりだったのですが、ある日、テレビでタカアンドトシさんが大勢の前で漫才

をしているのを見て「こんなに目立てる舞台があるんだ!」と思ったんです。両親には受験シーズンの直前に「芸人になる! 東京に行つてNSC(吉本総合芸能学院)に入る!」と打ち明けたのでびっくりしていました(笑)。今では憧れだった芸人さんと共演させていたただいているので、高校生の頃の自分に自慢したいです。

子ども時代に培った、 食べ物への感謝のこころ

テレビ出演や劇場でのお仕事のほかに、イベント出演などもやらせていただいています。その中で、よしもとが会社をあげてSDGs啓発事業に取り組んでいることもあって、SDGsをPRする



「今の子どもたちにSDGsの大切さをいかに伝えていくかが重要」と話す

しました。

SDGsの目標の中では、食べ物に関連する「飢餓をゼロに」が身近に感じます。私は出身が新潟県で、実家は農家でした。当たり前のように、うちでは食べ物を粗末にすることは御法度でしたし、大変な農作業を見て育ってきたので、食べ物のありがたみを実感しながら生活していました。私もよく田植えの手伝いをしていて、ゴールデンウィークは田植えをするためにある連休だと思っていました。あれ? みんな遊んでるけど、田植えしないの? って(笑)。それくらい農業は身近なものでしたね。

笑いで伝え 笑いで世界を変える

これから芸人として頑張りたいのほもちろんなんですけど、東京にある、よしもとの劇場「ルミネ theよしもと」に託児所を作りたいという夢があります。子連れのお母さんが劇場に来たときに、劇中にお子さんが泣いてしまつて、席を立ててしまう姿をよく見られます。託児所があれば、お母さんも心置きなく劇場に足を運べて、もっと楽しめると思います。最近では女性芸人もたくさん活躍していますし、SDGsの目標の「ジェンダー平等を実現しよう」

は託児所の所長としても働けたらうれしいですね。一見難しいSDGsを笑いを交えてわかりやすく伝えることは、素敵なことだと思います。世界をよくしていくSDGsの目標の実現のために、「SDGs-1グランプリ」のようなイベントは素晴らしい機会だと思うので、これからも続けていきたいです。

動画に出演したり、イベントに参加したりしています。SDGsの17の目標を初めて見たときは、大きな問題ばかりで私にはハードルが高すぎるかなと感じましたが、よく考えてみると実は身近な問題も多かったです。2017年に北海道で行われた「みんなのウィーク」や、18年に京都で行われた「京都国際映画祭」では、SDGsの要素を取り入れたネタを披露する「SDGs-1グランプリ」に参加しました。17の目標の中から例えば、「貧困をなくそう」や「海の豊かさを守ろう」などを、お客さんに選んでもらってほぼ即興でネタをやるというものです。「みんなのウィーク」では、なんと優勝

エコ活動を実践しています。もしこれから子育てをする機会があれば、子どもたちに農作業を体験してもらいたいです。そういう体験をすることで、自然の大切

「ジェンダー平等を実現しよう」につながると思うので、絶対に実現したいです。私自身子どもが好きで、ベビーシッターの資格をもっているのです。将来的に



各地のイベントに参加し、SDGsの大切さを笑いとともに届けている(京都国際映画祭にて:左から3番目)



環境保全活動の現場に 来たれ! 若者たち



ごみであふれかえっていた音楽フェスティバルの会場が、エゾロックの活動によりポイ捨ての少ないきれいな会場に生まれ変わった

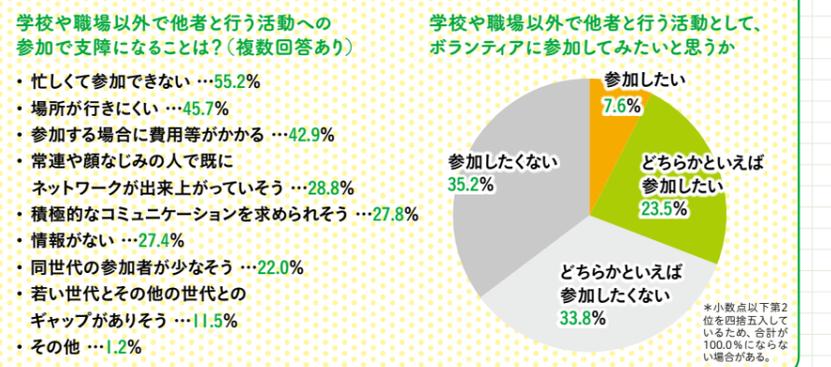
近ごろ環境保全活動の現場で「若者が少ない」「後継者がいない」などの声がよく聞かれます。実際に「平成29年度特定非営利活動法人に関する実態調査」では、多くの団体が課題として「人材の確保や教育」(66.9%)、「後継者の不足」(38.8%)を挙げています。もっと多くの若者に参加してもらうには、今、どんな変化が求められているのでしょうか。多くの若者とともに活動する特定非営利活動法人エゾロック代表理事・草野竹史さんに、自らの経験から若者を巻き込む取り組みについて聞きました。

総括インタビュー

オンラインを活用して メンバーの情報共有を図る

私たちの団体「エゾロック」は、10〜30代の若者が中心の環境NPOです。会員数は約300人。札幌近郊の若者を北海道内各地に送り、地元と連携して地域課題の解決に向け取り組んでいます。2017年度は延べ活動日数356日。広い北海道のどこかで毎日エゾロックが活動していたことになりました。18年度は胆振東部地震の被災地でもさまざまな活動を展開しています。当団体はもともと北海道最大級の音楽フェスティバル「ライジングサンロックフェスティバル」の環境対策活動からスタートしました。今もそれが活動の柱ですが、他にも道内全域で複数のプロジェクトを進行しています。会員はそのとき募集している単発のボランティア活動に参加するか、より深く活動に関わりたい場合はプロジェクトの中から関心のあるものを選んでメンバーになり、活動の企画から準備、現場運営まで年間を通して一つのプロジェクトに携わることもできます。毎日夕方になると、事務所には仕事や学校を終えたメンバーが集まってきて、プロジェクトごとに会議が始まります。全員ではありませんし、毎日来

若者のボランティアへの意識は?



「平成28年度 子供・若者の意識に関する調査」(内閣府)より作成
調査対象:15~29歳までの男女

なければいけないわけでもありませんが、夕方の事務所はいつも賑やかです。今は150人ほどがプロジェクトに所属していますが、全員が同じ濃度で活動しているわけではありません。学生ならテストやアルバイトなど、社会人なら仕事があるのが当たり前で、強制はしません。その分、メンバーの意

思疎通はオンライン上のコミュニケーションで図っています。当団体には会員のSNS(ソーシャル・ネットワークキング・サービス)があり、プロジェクトごとの掲示板に、会議で話し合ったことを全て記録しています。なかなか参加できないメンバーも、空き時間にスマホで掲示板をチェックするだけです。またそこに過去の活動記録やノウハウが全て蓄積されていくので、メンバーの入れ替わりがあったときも記録を辿ればすぐに分かります。

SNSは、若者が参加しやすく、継続しやすい環境づくりに欠かせません。リーダー性を求めすぎず、多様性を認める

実は当団体に来る若者のほとんどは、「環境を守りたい」「こんな問題を解決したい」などの明確な目的をもって来ているわけではありません。「友だちに誘われて」「フェスに行ってみようから」などの気軽な動機で来る人のほうが多くいます。でも私はそれでいいと思っています。社会を変えたいと思ったとき、巻き込むべきは確固たる目的をもった人ではなく、あまり社会に関心のない人や、環境問題に興味がない人です。そういう人を集めて一緒に活

動し、一緒に成長できたときこそ、社会が変わります。

これまでにエゾロックを単立していったメンバーが、今、道内あちこちで環境保全団体の牽引役として活躍しています。しかし彼らのほとんどは、エゾロック内で目立つリーダーだったわけではありません。どちらかというと、一歩踏み出すのが遅いタイプが多かったように感じます。「若い人材が少ない」と嘆く団体の多くは、リーダーになる人材を求めすぎているのでしょうか。熱心な人もそうでない人も、歩みの速い人も遅い人もいます。その「多様性」を認めること。そしてすぐに結果を求めるのではなく、ゆっくり全員で前へ進んでいくことが大切だと私は考えています。

もっと若者と対話して 共感を得ることが大切

NPO法人制度がスタートして20年

全員がリーダーでなくてもいい
なんとなく活動に参加してもいい
ゆっくり、小さな一歩でも、
全員が踏み出せば社会は変わる

が経過し、「後継者がいない」という声も聞かれます。「環境に関心がない」「やる気がない」など若者側に原因を探しますが、団体側にも問題があると思います。今まさに環境保全活動に取り組んでいる皆さんは、自分たちの考えを若者に押し付けていないでしょうか。団体側は「守ろう」と熱心に活動しているのですが、それを押し付けるだけでは、若者は「どうして守らなきゃいけないのだろう」と疑問を抱いてしまいます。そうなるのと「やらされている感」が生まれ、活動が続きません。もっと若者と対話してほしいと思います。活動意義に本当に共感できれば、彼らはもっと熱心に取り組んでくれるでしょう。

若者が多い当団体では、経済的な理由や、進学や結婚といった環境の変化などでやめていく人も少なくありません。しかし活動から離れたとしても、エゾロックでの経験は必ずどこかで活

きてきます。胆振東部地震が発生したとき、「いつから現場に入りますか」と何も言わないうちに自発的に声が出てきました。過去のメンバーからも続々反応があり、私たちは震災2日後には被災地に入ることができました。こういう動きこそが、これまでのエゾロックの活動の成果です。社会の問題を「自分ごと」として捉え、自分の考えで行動できる若者がもっと増えれば、社会は大きく変わっていくでしょう。



特定非営利活動法人
ezorock(エゾロック)代表理事
草野 竹史 さん

1979年札幌市生まれ。酪農学園大学環境システム学部卒。大学在学中に国際青年環境NGO[A SEED JAPAN]の活動に参加し、2001年、11人の仲間とともに環境団体「ezorock」設立。北海道最大級の音楽フェスティバル「RISING SUN ROCK FESTIVAL」の環境対策活動を中心に活動を展開。大学卒業後、一度就職するが、05年に退職。06年4月からezorock代表理事に就任し、現在に至る。



特定非営利活動法人 イカオ・アコ

愛知県東海市 <http://ikawako.com/>

活動名 フィリピンの水源地域におけるサトウキビ畑の有機農業への転換



理事
倉田 麻里さん
(若手PL4期生)

若者たちが国際協力の現場へ 一歩踏み出すきっかけの場を提供



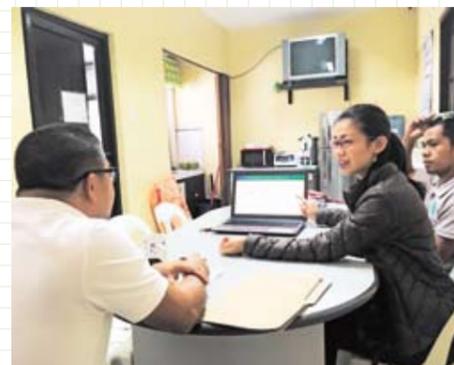
現地にいるときは、可能な限り現場に出向き、住民と話をしてニーズを引き出す

当団体は、日本人とフィリピン人が手を取り合って持続可能な社会をつくることを目指し活動しています。私は2008年から約10年間、現地駐在員としてフィリピンで活動していました。17年に帰国し、現在は日本で事務局業務を担いつつ、年に4、5回フィリピンへ行き活動をサポートしています。

私は大学院時代に多国籍の学生が共同生活する寮に住んでおり、そこで海外で働きたいという思いが芽生え、NPOの駐在員になる道を選択。大学院修了後、現地駐在員としてフィリピンのネグロス島へ行きました。

赴任当初は、現地職員は一人もおら

現地職員ゼロから出発し 国際協力センター設立



フィリピンの市役所にてミーティングの様子

ず、自宅の一部をオフィスとして利用する状態でした。最初に取り組んだのは「マングローブの植林地の定着率向上」で、そのための植林地選定、土地に適した苗木の準備、植林、メンテナンスと、全ての過程で住民の協力が不可欠でした。何度も植林地に足を運び試行錯誤するうちに、少しずつ他の現地のニーズにも気づくようになり、そこからはいくつものプロジェクト提案書をひたすら作成する日々です。食品加工施設をつくり、女性に調理の研修をする事業、養豚・養鶏事業、農地と住宅に湧水を供給する事業などを展開。現地職員も一人二人と増やし、現地の事務局の体制も整えていきました。

そして12年には、フィリピンのシライ市に「イカオ・アコ国際協力センター」

若手PL研修で学び、 日本の事務局機能を構築中

私は17年から若手PL研修に参加しています。フィリピンでの10年間で、自分のもっているものを出し切った感じがあったため、ここでまた新たな視点を取り入れたいと考えたからです。

若手PL研修で最もためになったのが、NPOの事務局のありかたについて学べたことでした。当団体は設立20年になりますが、実はこれまで現地活動に重心を置いてきたために、事務局の機能があまり働いていませんでした。これから事務局をつくっていくようにしている私たちにとって、研修は非常に有益であり、今まさに学んだことが活かされています。

当団体では現地に駐在して活動を推進するインターンや、国際協力を学びたいという若者のための国際協力センター研修生を常時募集しています。今後多くの若者たちに、国際協力の現場に一歩踏み出すきっかけの場を提供していきたいと考えています。

NGO・NPOの活動事例から



特定非営利活動法人 トチギ環境未来基地

栃木県芳賀郡益子町 <https://www.tochigi-cc.org/>

活動名 若者ボランティア育成・マッチング制度による、活動団体の「高齢化」、「後継者不足」問題の克服を通じた森林・里山保全活動強化事業



若手PL2期生
神 彩乃さん
(若手PL2期生)

今の若者にとってボランティアは 当たり前之选択肢の一つになっている

復興支援ボランティアから 環境保全活動の道へ

私が環境保全活動に興味をもったきっかけは、東日本大震災の復興支援ボランティアに参加したことでした。被災地で側溝の泥出しや家屋の片付けなどさまざまな活動をするなかで、漁業を再開するまで林業に携わるグループを手伝う機会があり、そこで「海と森はつながっているから、森をきれいにするには、いづれ漁業を再開したときいい魚が捕れるようになる」という話を聞きました。海と森が繋がっていることは学校で習いましたが、時間がかかるそのプロセスを本当に実践していることに衝撃と感銘を受け、それが今の環境保全活動につながっています。

当団体では年に2回、3か月間の合宿型ボランティアを受け入れています。彼らが中心となって栃木県内数か所の森林・里山を整備しており、現在、私はその作業計画作成や現場マネジメント、広報などを担当しています。当初は現場での整備活動がほとんどでしたが、若手PL研修で計画の立て方や広

助成団体の中から、環境保全活動の現場に飛び込んだ若者の声として「若手プロジェクトリーダー研修生(若手PL)」が活躍する2団体と、今まさに若者を取り込む活動に力を入れている2団体を紹介します。

報の手法を学び、今、研修で得たものを組織へ還元しています。

ボランティア参加者の半数以上が森林・里山での整備作業は初めてですが、現場がきれいになっていくことや参加者同士のコミュニケーションの楽しさにはまると、何度も参加してくれそうです。慣れたところに「この人は初めてだからサポートしてね」と簡単なリーダー役を依頼。それを重ねることで、作業の技術だけでなく、他者と活動するノウハウやリスクマネジメントも理解し実践できるようになっていきます。

初めから「環境を守りたい」と熱意をもって人は少数ですが、私自身がそうだったように、何がきっかけで環境保全に興味をわくかは分かりません。だからこそ、私たちは今後も小さなピースを散りばめていくように情報を発信していきたいと考えています。



神さんは「私たちの役割は、森林・里山と人をつなぎ、人と人をつなぐこと」だと語る

将来にわたり豊かで美しい森林・里山を保全していくためには、ボランティア活動の継続と発展が不可欠です。しかし森林・里山ボランティア団体数は増加しているものの、参加者の大半が60歳以上というのが現状です。そこで当団体では、若者のボランティア活動の機会を増やし、担い手として育み、高齢化や後継者不足に悩む団体とマッチングする活動に取り組んでいます。

最近の若者にとって、ボランティアは特別なことではなく、当たり前之选択肢の一つになっていると感じます。



経済的な理由による子どもの体験の機会の格差をなくしたいという思いから、子どもたちへの自然体験活動にも力を入れている



次世代のためにがんばろ会

熊本県八代市 <http://www.ganbarokai.jp>

活動名

八代海河川・浜辺の大そうじ大会と
干潟保全に向けた青少年ワークショップ



代表
松浦 ゆかりさん

青少年の意見を取り入れた活動により 八代海のすばらしい環境を次世代につなぐ



河川ごみ拾いイベント終了後、参加者全員で撮影

「次世代の子どもたちが健康で安全な生活を送れるように」をコンセプトに設立された当団体は、子どもごみパトロール隊や河川学習など、子どもや青少年が参加する企画を数多く実施しています。なかでも2018年まで毎年開催していた「かき殻まつり」は、かき殻を使った河川浄化と環境学習を目的としたイベントで、最も多いときは800人以上が参加。そのほとんどが八代市内の高校・高専生でした。前年のかき殻ネットを引き上げ、新しいネットを投入するのは重労働ですが、男女問わず川の中で顔に泥をつけながら一生懸命作業する姿に感動しました。

青少年の企画による ワークショップ開催を目指す



かき殻まつりの様子。きついきたくない作業でも熱心に取り組む高校生

今、私たちが目指しているのは、青少年の企画により、河川・浜辺のごみ拾いと干潟ワークショップを開催することです。なぜ「青少年が企画すること」にこだわるのかというと、彼らは大人が考えつかないような視点をもっているため、青少年のアイデアを取り入れることで、今後の活動の幅を広げることが期待できるからです。

また私たちが目指す八代海のラムサール条約登録は、一過性のものではなく、環境が維持される限り永続的なものです。大人だけで考えるのではなく、登録を目指す段階から青少年に関心をもってもらい、彼らの意見を取り込むことで、八代海のすばらしい環境を次世代につなぐことができると思っています。

ECO WORD

やさしいエコワード講座

- ①6次産業化……農林漁業者(1次産業)が食品加工(2次産業)、流通・販売(3次産業)にも取り組み、農山漁村を豊かにしようとする取り組み。
- ②巻き狩り猟……銃器を用いた狩猟方法の一つ。捕獲作業を指示する「指揮者」、待機し獲物を撃つ「射手」、獲物を追出す「勢子」がグループとなり、イノシシやシカなどを狩る。
- ③罾猟……罾を使う狩猟方法。「箱罾」「くり罾」など様々な罾がある。
- ④ラムサール条約……正式名称は「特に水鳥の生息地として国際的に重要な湿地に関する条約」。渡り鳥を保護するために、国家間で協力して水辺の自然を保全するための環境条約。

子ども時代にも身につけた環境意識は生き続ける

私たちはイベント等を実施する際、市内の高校全8校を訪ね、校長や担当教諭に活動の趣旨を説明して参加を求めます。またイベント後には、各学校にお礼状や記録写真などを届け、次回の参加につなげています。ただ残念なことには、八代市内には大学がなく、進学や就職をきっかけに、若者の多くが市外に流出。小・中・高校生に八代海や球磨川の環境保全の教育機会を設け、意識づけをしても、地域で将来的に行動につなげてもらうことが難しいのが現実です。しかし市外に引っ越しても、子どものうちに身につけた環境保全の意識は生き続けます。広い視点で見れば、私たちの活動が決して無駄にはならないことを期待し、今後も未来を担う青少年へ自然環境の素晴らしさを伝えていきます。



一般社団法人 はまのね

宮城県石巻市 <https://www.hamaguridou.com/>

活動名

地域と猟師の協働による
持続的なニホンジカ捕獲管理モデルの構築



パートナー／クリエイティブ
ディレクター(meet)
大島 公司さん

講習会や体験イベントを入り口にして 狩猟の世界に若い人材を引き込む

増えすぎたシカの駆除のため 新たな猟師が求められる

東日本大震災の津波で壊滅的な被害を受けた牡鹿半島の蛤浜を再生し、次世代に残していくために、私たちは2012年に「蛤浜再生プロジェクト」をスタートさせました。「カフェはまぐり堂」を拠点に、飲食店、セレクトショップ、マリッジジャー、林業・家具製造など幅広い事業を展開し、16年から「狩猟の6次産業化」にも取り組み始めました。増えすぎたニホンジカを捕獲し、鹿肉の販売や狩猟工ツールリズムも導入して狩猟の経済的自立を目指すもので、その一環として、今、猟師を増やす試みをしています。

石巻市周辺部に生息するニホンジカの数、自然植生に影響が出ない密度を大きく超えています。想定自然増加数に対して捕獲頭数が不足している現状ですが、15年の市の猟師の数はピーク時の6分の1となり、高齢化も進行放っておけば里山の荒廃が進み、生物多様性も保てなくなるため、新たな猟師が必要とされています。

とはいえ、新たに狩猟を始めるのは簡単ではなく、狩猟に抵抗感をもつ人が少なくありません。そこで当団体では、石巻エリアで一般的な猟銃による



座学だけではなく、実際に森に入り罾の説明などもする

巻き狩り猟ではなく、罾猟の育成に力を入れることにしました。猟銃を所持する必要がないため、入門のハードルが低いだらうと考えたのです。

もっと扉をオープンにして 自然と人との接点をつくる

罾猟師を増やすために実施しているのが、「捕獲技術講習会」と「罾体験イベント」です。講習会は狩猟免許所持者が対象で、捕獲効率を上げるテクニックなど実践的な内容です。一方体験イベントは狩猟に興味はあるものの免許保持していない人が対象の気軽な内容です。参加者はSNSなどで募り、傾向としては20〜40代が最も多く、女性も4割ほどいます。参加者からは「思ったよりもお金がかかりそう」と



「解体技術講習会」も実施している。どの企画も予想より女性の参加が多かったという

いった意見もあったものの、多くは「縁遠かった狩猟の世界が少し身近になった」「鹿の害に困っているからやってみよう」と好評でした。イベント参加後に狩猟免許を取得した人も出るなど、一定の効果が出ています。

狩猟に限らず一次産業全般で人材不足が叫ばれている今、特に若い人は自然と関わった暮らしが縁遠くなっていると感じます。今後もイベント等の機会を通じて、狩猟や有害動物駆除、野生動物との関わりに興味がある人に向けて、もっと扉をオープンにしていきたいです。閉ざされた世界や特殊な世界だと思われがちですが、実ははるか昔から暮らしのそばに存在しているものなので、私たちがその接点となっていきなりたいです。



福島から世界へメッセージ コットンベルトの実現で さらなる復興を目指す

2011年に起きた東日本大震災から被災地では復興が進んでいます。しかし、いまだにそれぞれの地域では、住民だからこそ感じる風評被害やコミュニティ問題が残されており、問題の解決が課題となっています。今回は復興に焦点をあて、福島県いわき市でコットン畑を運営し復興事業を行っている特定非営利活動法人ザ・ピープルにお話を伺いました。

特定非営利活動法人 **ザ・ピープル**

活動名
福島浜通りでの帰還を後押し
コットンベルト実現化事業

📍 福島県いわき市

🌐 <https://npo-thepeople.com/>



理事長
吉田 恵美子さん

ザ・ピープルは、福島県いわき市を拠点とし、「住民主体のまちづくり」をモットーにさまざまな支援事業を行っている団体。古着リサイクルなどの事業を行いながら、東日本大震災後からは、復興支援事業に注力し、オーガニックコットンの栽培・ものづくり事業やフードバンク事業を展開している。

東日本大震災から8年。ザ・ピープルが活動の拠点とするいわき市では、地震だけでなく原発の問題も抱え、いまだにさまざまな地域の課題があります。震災後、農家では、原発事故の影響から、野菜を作っても買ってもらえないという風評被害に悩まされ、農業をやめてしまう人たちも多くなりました。また、周囲の町からいわき市に避難してきた被災者と地域住民との間で、それぞれの置かれた立場や、復興に対する思いなどの違いから、コミュニティのつながりに亀裂が生じる危機にも陥りました。

そんな状況のなか、ザ・ピープル理事長の吉田恵美子さんは「誰も置き去りにしない世界」を実現するために、震災直後からボランティアセンターの運営など、さまざまな復興支援活動を行ってきました。その一環として、2012年から風評被害の払拭や避難者と地域住民とのコミュニケーション問題の解決を目標に、有機農法で育てるコットン栽培事業を開始しました。コットンの栽培を選んだ理由は、塩害に強いというコットンがもつ特性以外にもあったと吉田さんは話します。「重要なのは、人が口に入れない作物とい



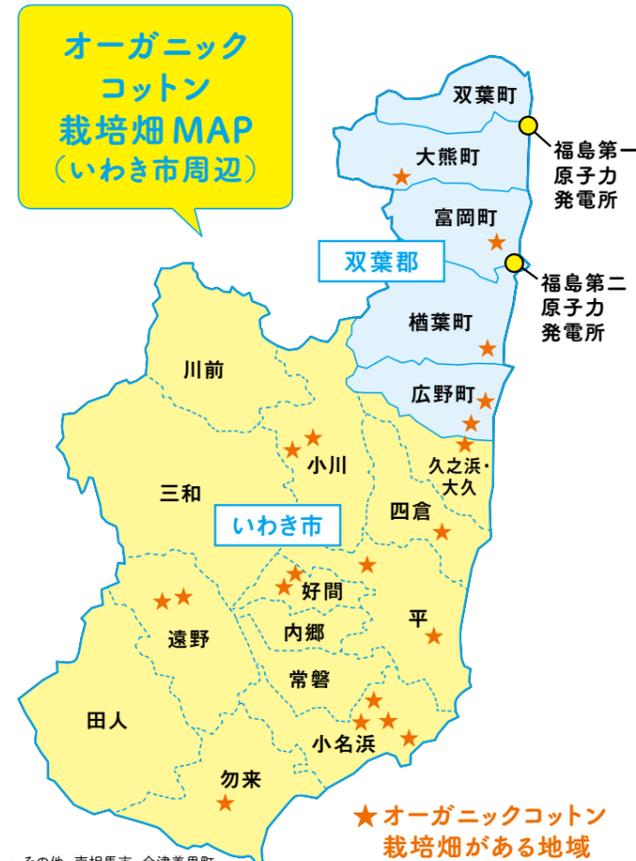
在来種の茶綿を栽培。コットンには、ゴシボールという動物が苦手な成分が含まれており、獣害はほとんどない



収穫したコットンは手作りの人形を作ったり、紡績工場で糸にされ、タオルなどに加工される



コットンを手紡ぎした糸で作られるランプシェードはイルミネーションイベントで注目されている



コットン畑の運営には、震災前から行っている古着回収などの事業で培ってきた人脈が活かされ、5人ほどのスタッフを中心となり管理。いわき市だけでなく、双葉郡広野町など広大な範囲に存在する畑は、地域の人や県外から来るボランティアの力によって成り立っています。「ボランティアの参加を通して、福島県の現状を見てもらえ、農家さんの気持ちも分かってもらえることがこの事業のメリットです」と吉田さんは言います。また、地域住民や避難者が一緒に汗を流して農作業をすることで交流が生まれるのも大きなメリットです。収穫祭や、もの作りなどのイベントを開催し、コミュニ

ティーの新たなつながりが構築されていきます。18年10月には、いわき市にて「全国コットンサミット」が開催され、全国のコットン栽培に携わる人々が集まり情報交換をしました。「将来的には、世界に向けて情報発信をしていきたいです」とこれからの展望を話す吉田さん。実際にボランティアに参加してくれた東京の大学生が、ザ・ピープルの事業を見て感じたことを海外に発信する活動も動き出し、若い世代の影響力は風評被害の払拭に大きな力となっていると言います。吉田さんはコットン栽培事業への思いを「自然の大切さと怖さを体感している福島県の人だからこそ発信できるメッセージがあるはず。がんばっている福島県と一緒に手助けしてくれる仲間を増やしたいです。県内に広がるコットンベルトを実現することで、地域のつながりが強くなると思います。そして、福島県から主体的に行動し、情報を発信していくような、復興の次のステップへ進みたいです」と語ります。今後、コットン畑がますます広がり、福島県の本格的な復興につながっていくことを期待します。



スタッフは一からコットンのことを学び、工夫を重ねながら栽培している



木柄の製品は年間約40万丁が販売され、その売り上げの一部は地球環境基金を通じて環境保全活動に役立てられている。製品には、「環境活動応援商品」の印として、シールが貼られている



日本のもの作り、そして森林を守るために

木柄の製品をこれからも残していきたいという思いがある一方で、環境保全の観点からは様々な問題が存在しています。「海外からの木材の輸入事業に携わることがあるので、森

ル製のほうが優れていますが、シヨベルやスコップは手に持って使う道具です。スチール製にはない、木がもつ温もりを好む人が今でもたくさんいます。そのこだわりには私たちが応えていきたいのです」とその理由を森さんは話します。

また今、浅香工業で作られるシヨベルやスコップは日本唯一の国産です。木柄の部分は、中国やインドネシアで伐採された木材を輸入し、国内の工場加工しています。過去には他社でも国産製品がありました。近年では海外からの輸入製品だけになってしまいました。それでも、浅香工業は国産であることにこだわっています。国産製品は輸入製品に比べ、熱処理部分などの加工処理精度が高く、品質を高水準に統一することができ、供給体制に関しても高い利便性を保つことができるからです。

—— 自然の循環を崩すことなく木のよさを伝えていきたい



浅香工業株式会社

国内で唯一、国産のシヨベルやスコップなどを製造、販売し、業界トップを走る浅香工業株式会社。その中でも、主力商品である木柄のシヨベル、スコップへの思いや、木にまつわる環境保全活動について伺いました。



企業ロゴに込めた「強さと優しさ」

浅香工業株式会社（以下、浅香工業）は、土木作業や農作業、園芸作業などで使われる、シヨベルやスコップなどの道具を中心に製造し、全国で販売しています。工事現場でプロが使用するものや、趣味の園芸用など、用途に合わせて様々な大きさや形状の製品を提供しています。

浅香工業の歴史は約350年前にさかのぼります。江戸時代寛文年間、今の大阪・堺市で打ち刃物問屋として創業。明治時代に入ってから、西洋文化が広まるにつれ、鉄道などの発展に伴いシヨベルやスコップの大きな需要が見込まれると考え、浅香工業が日本で初めて製品化し、量産を開始しました。

企業ロゴや商品のブランド名にもなっている「金象印」に込められた思いを同社商品部企画開発課課長補佐の森雅宏さんは「象は力強く、優しさもあり、さらに意外と足も速いといわれています。弊社の商品を使うことで作業効率がよくなる、楽になるという思いが込められています」と話してくれました。

木の温もりを感じてもらうために

近年、工事現場で硬い地面を掘るときなどに使用されているシヨベルやスコップは、壊れにくいスチール製のものが主流となっています。しかし浅香工業では、現在でも持ち手の部分が堅くて丈夫な檜の木で作られた、木柄のシヨベルやスコップを主力商品として製造しています。重さや価格もスチール製とほとんど同じにも関わらず、木柄のシヨベルやスコップはまだまだたくさんの方から需要があります。「道具の単純な強さだけを求めるのであれば、スチール



浅香工業でのシヨベルの生産量は、スチール製が6割、木柄が4割

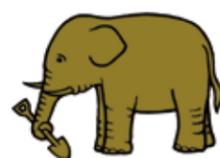
林の伐採問題や植林の状況などは常に把握するよう努めています。海外の植林計画区では伐採と植林のバランスはある程度うまく循環していますが、木の種類によっては、伐採し加工できる大きさに成長するまで40〜50年かかることもあり、計画的に植林しても追いつかない現状も見えてきています。伐採地も年を追うごとに、どんどん奥地になっているので、輸送の安全性をいかに保つことも重要です。今後は木材の調達も難しくなっていくのではないかと心配しています」と木を使用する製品生産の課題を話します。そこで浅香工業では、別の素材を使用して、木の温

もりある手触りを再現できないかと、新しい商品開発にも積極的に取り組んでいます。

—— 自然の循環をこれ以上に崩すことなく、これからも木製製品を作りたいという企業の思いから、木柄のシヨベルやスコップの売り上げの一部を地球環境基金に寄付いただいております。森さんは「地球環境基金に寄付することで、間接的ではありますが、自然に少しでも還元したいと考えています。これからも日本のもの作りを残し、木のよさを伝えていくために、まずは森林を守ることに貢献していきたいです」と話してくれました。

企業情報

浅香工業株式会社



浅香工業株式会社は、「人の生活」をテーマに、350年の伝統に培われたノウハウを生かし多くの生活関連用品を提案、提供しています。

本社所在地 大阪府堺市

URL <http://www.asaka-ind.co.jp/>



お話を伺った商品部企画開発課 課長補佐の森雅宏さん

全国8地方の会場で「地方大会」を開催！

今年度で4回目を迎える「全国ユース環境活動発表大会」は、日本全国の高校生が実践している環境活動を発表し、交流する場です。今年度からは、全国8地方の会場で「地方大会」を開催。応募のあった152団体の中から、書類選考を通過した95団体が出場しました。日ごろの活動や成果を発表するのはもちろん、「SDGsについてみんなで考えよう」と題したワークショップも開催。同じ地方で環境を守る活動をしている仲間と交流できる大会となりました。



地球環境基金のサポーター

地球環境基金をご支援くださった方々

地球環境基金に、平成30年7月から12月末までにご寄付・ご支援くださった方々は下記のリストのとおりです。個人や企業・団体としてご協力いただいた方はもちろん、さまざまなイベントを通じて募金活動にご参加・ご協力いただいた大勢の方々に深く御礼申し上げます。

平成30年7月から12末日現在までに437件、総額**5,485,800円**のご支援をいただきました。ありがとうございました。

主催 全国ユース環境活動発表大会実行委員会(環境省/独立行政法人環境再生保全機構/国連大学サステイナビリティ高等研究所)

後援 読売新聞 東京本社

協力 環境省地方環境パートナーシップオフィス(EPO)/地球環境パートナーシッププラザ(GEOC)/ESD活動支援センター

協賛 キリン株式会社/協栄産業株式会社/SGホールディングス株式会社/三井住友海上火災保険株式会社

KIRIN KY&EI S&H MS&AD 三井住友海上

地方大会出場校

北海道地方大会 / 11月11日 / 札幌	北海道	北海道	北海道
北海道 帯広南商業高等学校	北海道 旭川農業高等学校	北海道 函館水産高等学校	北海道 北見北斗高等学校
北海道 七飯高等学校	北海道 標茶高等学校 A	北海道 標津高等学校	北海道 羽幌高等学校
	北海道 標茶高等学校 B	北海道 標茶高等学校 C	北海道 札幌旭丘高等学校
東北地方大会 / 11月11日 / 仙台	青森県立	青森県立	青森県立
岩手県立 遠野緑峰高等学校	宮城県 志津川高等学校	青森県立 名久井農業高等学校	青森県立 むつ工業高等学校
山形県立 山形西高等学校	山形県立 米沢興譲館高等学校	宮城県 農業高等学校	宮城県 多賀城高等学校
		福島県立 平工業高等学校	福島県立 相馬農業高等学校
関東地方大会 / 12月16日 / 東京	茨城県立	栃木県立	群馬県立
群馬県立 利根実業高等学校 B	群馬県立 尾瀬高等学校	茨城県立 竹園高等学校	栃木県立 栃木農業高等学校
神奈川県立 中央農業高等学校	慶應義塾 湘南藤沢高等部	群馬県立 勢多農林高等学校	千葉県立 鎌ヶ谷西高等学校
		新潟県立 佐渡総合高等学校	静岡県立 浜松城北工業高等学校
中部地方大会 / 12月9日 / 名古屋	石川県立	石川県立	富山県立
エクセラン高等学校	岐阜県立 岐山高等学校	石川県立 津幡高等学校	富山県立 中央農業高等学校
名古屋市長 名古屋商業高等学校	愛知県立 木曾川高等学校	岐阜県立 不破高等学校	岐阜県立 恵那農業高等学校
		愛知県立 知立東高等学校	愛知県立 時習館高等学校
近畿地方大会 / 11月18日 / 大阪	滋賀県立	京都府立	京都府立
清風高等学校	大阪府立 農芸高等学校	京都府立 桂高等学校	京都府立 綾部高等学校
兵庫県立 香住高等学校	神戸市立 手女子高等学校	近畿大学附属 豊岡高等学校	兵庫県立 神戸商業高等学校
		奈良学園 中学校・高等学校	大阪府立 長尾高等学校
中国地方大会 / 11月18日 / 広島	山陽女子	岡山県立	岡山県立
岡山県立 勝山高等学校	岡山学芸館高等学校	山陽女子 中学校・高等学校	岡山県立 矢掛高等学校
出雲西高等学校	島根県立 江津工業高等学校	岡山県立 玉野高等学校	広島県立 広島工業高等学校
		山口県立 防府商工高等学校	
四国地方大会 / 12月16日 / 高松	徳島県立	徳島県立	高知県立
徳島県立 徳島商業高等学校	香川県立 笠田高等学校	徳島県立 新野高等学校・徳島県立 小松島西高等学校 勝浦校・徳島県立 小松島高等学校	高知県立 伊野商業高等学校
		愛媛県立 上浮穴高等学校	
		愛媛県立 今治西高等学校	
九州・沖縄地方大会 / 12月9日 / 福岡	福岡県立	福岡工業大学	東筑紫学園
大分県立 玖珠美山高等学校	大分県立 大分東高等学校	福岡県立 伝習館高等学校	福岡工業大学 附属 城東高等学校
長崎県立 五島高等学校	熊本県立 岱志高等学校	長崎県立 対馬高等学校	長崎県立 口加高等学校
		宮崎県立 都城工業高等学校	鹿児島県立 鶴翔高等学校

- 個人**
- 安斉 房枝
 - 飯田 浩二
 - 飯田 登代子
 - 石井 宏作
 - 伊藤 孝司
 - 伊藤 文子
 - 伊藤 嘉章
 - 井上 雅晴
 - 井本 敦幸
 - 上原 美月子
 - 大橋 史郎
 - 岡本 昇
 - 小川 肇
 - 小木 晶子
 - 奥山 美紗子
 - 笠井 洋
 - 加藤 信幸
 - 門畑 裕美子
 - 唐鎌 孝子
 - 菅野 泰男
 - キクチ ジュンコ
 - 熊倉 信子
 - 倉嶋 江実
 - 小久保 千恵子
 - 小島 えり子
 - 小西 みゆき
 - 小林 大
 - 小林 正二
 - 作山 美恵子
 - 笹生 真悟
 - 佐野 郁夫
 - 篠原 泰
 - 嶋元 誠
 - 志村 和男
 - 末吉 寛
 - 菅間 玲子
 - 鈴木 卯位子
 - 関根 輝彦
 - 大宝院 良子
 - タイラ マキコ
 - 高橋 宜子
 - 高橋 浩二
 - 竹内 圭吾
 - 竹下 真二
 - 田坂 英樹
 - 田中 裕子
 - 谷井 克美
 - 谷山 正恵
 - 津田 政行
 - 時村 候彦
 - 土橋 憲臣
 - 仲 洋子
 - 中島 清光
 - 中原 宏
 - 西久保 裕彦
 - 西澤 政幸
 - 西條 絢子
 - 野口 皓生
 - 野田 好和
 - 土生 亜紀子
 - 平岡 大作
 - 藤岡 俊輔
 - 藤田 周一
 - フジワラ カズミ
 - 富士原 秀二
 - 古荘 元信
 - 星野 正明
 - 牧谷 邦昭
 - 松浦 明美
 - 松岡 達郎
 - 松岡 多美子
 - 眞鍋 静夫
 - 丸山 ゆかり
 - 湊 亮策

- 企業**
- イーパートナーズ株式会社
 - 有限会社インターリンク
 - SGホールディングス株式会社
 - 株式会社大室明治也
 - オリンバス株式会社
 - 協栄産業株式会社
 - キリン株式会社
 - 有限会社倉田商店
 - 車屋 ホルテックス
 - 五島冷熱株式会社
 - 株式会社J-WAVE
 - システムニコル株式会社
 - 株式会社七豊物産
 - 株式会社ジャパンクリエイト
 - 株式会社そごう・西武
 - 宙の音株式会社
 - 有限会社第一環境
 - 株式会社橋フオーサイトグループ
 - 績特許事務所
 - テラサイクルジャパン合同会社
 - 東京地下鉄株式会社 総務部環境課
 - 東光電機工業株式会社
 - 日本リライアンス株式会社
 - ファミリーマート 美濃上条店
 - ファミリーマート 八王子甲州街道店
 - 株式会社富士通エフサス
 - 株式会社富士通マーケティング・オフィスサービズ
 - ブックオフコーポレーション株式会社
 - ポケットカード株式会社
 - 三井住友海上火災保険株式会社
 - 株式会社宮城運輸

- その他**
- 斑鳩町役場 環境対策課
 - 石巻市役所 生活環境部環境課
 - 遠軽町 白滝総合支所地域住民課
 - 小山市 環境課
 - 白岡市長 小島卓
 - 大仙市役所 西仙北支所市民サービス課
 - 築上町役場 築城支所
 - 長門市役所 三隅支所
 - 三郷市役所 クリーンライフ課環境政策室
 - 南アルプス市役所 市民部環境課

- 国・地方公共団体**
- いばらき環境フェア2018 梅花女子大学茶道部
 - 岩倉市環境フェア2018実行委員会
 - 岩見沢商工会議所
 - エコプロ2018
 - エコロジーマーケット実行委員会
 - 大栗子どもけまりに会
 - 河田菓子舗
 - グローバルフェスタJAPAN2018
 - 子ども霞が関見学デー
 - 学校法人玉川学園
 - まちカフェ アルテ
 - 社会福祉法人ゆあみ会
 - ロハスフェスタ淡路島2018
 - ロハスフェスタ東京2018
 - ロハスフェスタ万博2018
 - ロハスフェスタ広島2018 (五十音順・敬称略)
 - 会津若松市役所 市民部環境生活課

※このリストは、地球環境基金への振込通知書等に記載された名称・氏名に基づき作成しておりますので、個人および企業・団体等の区別につきまして必ずしも正確ではない場合があります。また、紙面の都合により、ご寄付・ご支援くださったすべての方々のお名前を掲載できない場合がございますので、ご了承ください。

「地球環境基金便り第46号」読者アンケートにご協力ください。

アンケートは、このページのアンケートはがき、およびホームページ「地球環境基金の情報館」のアンケートページ(<https://www.erca.go.jp/jfge/info/publicity/taylor/form/46.php>)において受け付けております。皆様のご意見・ご要望をお聞かせください。

PRESENT

アンケートにお答えいただいた方の中から抽選で10名様に、地球環境基金オリジナル・エコバッグをプレゼント(応募締切:2019年8月末)。当選者の発表は、プレゼントの発送をもって代えさせていただきます。



ご寄付口座のご案内

「地球環境基金」へのご寄付は、下記口座より受け付けております。ゆうちょ銀行からのお振込みの手数料は無料になります。

銀行名/支店名	口座番号	口座名称
ゆうちょ銀行	00190-664214	地球環境基金
新生銀行/本店	普通預金 0789699	独立行政法人 環境再生保全機構 地球環境基金
三井住友銀行/東京公務部	普通預金 3013615	
三菱UFJ銀行/本店	普通預金 7637448	
みずほ銀行/本店	普通預金 2413416	
りそな銀行/赤坂支店	普通預金 1023850	

- ①独立行政法人環境再生保全機構は、特定公益増進法人に指定されており、税制上の優遇措置を受けることができます。
- ②ゆうちょ銀行以外の銀行からお振込みいただく場合は、領収書が発行できません。領収書の発行を希望される方は、お手数ですが、地球環境基金部 基金管理課(TEL:044-520-9606)へご連絡ください。
- この他にも、クレジットカードを利用したご寄付など、多様な寄付方法をご用意しています。詳しくはウェブサイトをご覧ください。

地球環境基金の情報館 <https://www.erca.go.jp/jfge/>